

奏



2015 AUTUMN VOL.44



公益財団法人 日本室内楽振興財団

座談会

落語もクラシック音楽も同じく古典芸術。  
アコースティックで奏でるものには、  
洋の東西を問わずに通じるものがある。



左：桂米團治さん  
中：小栗まち絵さん  
右：響敏也さん

連日の酷暑を洗い流すよつな長雨が続いた九月初旬。ヴァイオリニストの小栗まち絵さんと落語家の桂米團治さんにお集まり頂き、いつもの日下部吉彦さんに代わって、作家であり音楽評論家である響敏也さんが司会を務め、お二人にお話を伺いました。印象に残る音楽体験をはじめ、落語とクラシック音楽の共通点や桂米團治さんと響さんが手掛ける新しい試み「おべらくご」の魅力などについて大いに盛り上がりました。

**バツハの無伴奏ソナタを演奏して、非常に面白く、もつと謎を解きたいと思いました。——小栗**

**響** まずお二人の出会いからお伺いできますか？

**米團治** ABCラジオの「シンフォニーホールアワー」という番組で、神尾真由子さんと一緒に取材でお伺いしたのが最初ですかね？

**小栗** そうだったかな…。

**米團治** 家も近いですし、様々な接点があつて、いつが最初という意識はないですね。

**響** なるほど。では、初めての音楽体験を教えてください。

**小栗** 私は四歳からヴァイオリンを始めて、一緒に育ってきた感じなんです。ただ、小学六年の時、バツハの無伴奏ソナタを演奏して、非

常に面白かったのを覚えてます。もつと謎を解きたいという感じで強く惹かれましたね。

**米團治** 四歳から始められて六年生になるまで嫌になることはなかったんですか？

**小栗** ええ、ずっと楽しかったですね。父が仲間とクアルテットを組んでいて、家で演奏する時に参加させてもらったりしていました。音楽会にもよく連れて行ってもらいましたね。

**響** 米團治さんの音楽体験は？

**米團治** 私は特別な音楽教育はほとんど受けていなくて、サッカースクールに通うスポーツ少



響さん

ロッと治ったんです。

**米團治** へえ。

**響** その時、音楽ってすごい力があるなと感心したんです。

**小栗** 生きる勇気みたいなものが湧いてきた？

**響** ええ、ベートーヴェンに生きる勇気を与えて頂いたので、御恩返しをしたいと思います。ウイーンへいくと必ずお墓参りにも伺います。

**モーツァルトは感情の狭間を縫う音楽だと感じます。——米團治**

**米團治** やはり十代の体験って強く残りますね。私がサッカー少年だった頃、スポーツ少年団の日独同時交流という企画で、一か月間ドイツにホームステイをしたんです。その当時、エリンスト・サイラーさん一家と交流があったためオーストリアのお宅を訪問。その際、モーツァルトの生家を訪ねたんですよ。生家に入った途端「なんか懐かしいな…」と感じて「僕は生まれ変わりになろう！」と決めた（笑）。高校二年生の時でした。



小栗さん

**響** なるほど。

**米團治** 単純だけれど味わいがあるというか…。

**小栗** はい、単純でもただごとでない命を宿している…。

**響** 四十番の冒頭のピアノも素晴らしいですね。

**米團治** なんてあんなこと思

年でした。それが、小学六年生の時、全クラス対抗で「白鳥の湖」を演奏する機会があつて指揮者選ばれた。それが音楽の原体験ですかね。一番印象に残っているのは、中学時代の夏休みの宿題。「クラシック音楽を五曲聴きましょう」というのがあつて、親父に「クラシックのレコードある？」と聞いたら「勧進帳と越後獅子と…」と（笑）。「そうじゃなくてオーケストラの曲や」と言ったら「そんなもんあるかい！」と言われて、初めてレコード屋に行きました。それで、チャイコフスキーの「白鳥の湖」と「くるみ割り人形」の抜粋が収録されたレコードと、なぜかモーツァルトの「フィガロの結婚」「魔笛」の序曲とシンフォニーの四十番と四十一番も買ったんです。それを聴いた時、モーツァルトは難しく、チャイコフスキーは感想文が書きやすいと感じたのを覚えています。そんな経験から徐々にクラシックに興味を持ち始めたんですね。音楽の時間はクラシックを聴いてその感想を訊かれるというような教育で、たまたま



米團治さん

NHK交響楽団神戸公演のお知らせをテレビで見て「学校で聞いた音楽や！」と思つて、神戸文化ホールへ行った。それが生で聴いた初めての体験ですね。レコードとは全然違うなあと感動し、興奮しました。今から思うと、チケットを買いに行くこと自体、潜在的にクラシックが好きだったのかもしれないですね。響さんの原体験というのは？

**響** 兄がクラシックファンだったのでその影響ですね。

**米團治** ご両親ではなく？

**響** はい。私は中学二年生の頃、何もかもわからなくなつたんですよ。例えば、1+1は何故2なのかとか…。

**米團治** 賢いかアホか、どつちかやね（笑）。

**響** 恐縮です（笑）。今まで信じていたものが全てワケがわからなくなつてしまった。その状態が二年程続いて、ある日ベートーヴェンの音楽を聴いたら、ケ

PROFILE 敬称略

**【響 敏也】(司会)**  
作家・音楽評論家。スタジオ・オーケストラのトランペット奏者として演奏活動後、放送作家の執筆活動。評論や随筆を新聞・雑誌に執筆。オペラと落語を合体させた「おべらくご」の創案と脚本、音楽舞台の脚本（大阪フィル・ポップス、アンサンブル・ベガ等）や、放送音楽番組台本を担当。著書「親父の背中にアンコールを〜朝比奈隆の素顔の風景」等。脚本おべらくごVol.3和菓子屋騒動記「こしあん取って!」（コシ・ファン・トゥッテ）、歌劇「あしたの瞳」、歌劇「ブラック・ジャック」等。

**【桂 米團治】**  
落語家。1958年大阪生まれ。78年桂米朝に入門、芸名桂小米朝。92年大阪府民劇場賞奨励賞受賞。2003年漸家生活25周年記念落語会にて全国8ヶ所ツアー「小米朝らくごの世界」を開催。05年兵庫県芸術奨励賞受賞。08年五代目桂米團治を襲名。京都南座を皮切りに全国各地で77回の襲名披露公演を実施。09年第3回ベストファーザーIn関西文化部門受賞。

**【小栗 まち絵】**  
ヴァイオリン奏者。桐朋学園大学卒業。インディアナ大学アーティストディプロマ課程修了。日本音楽コンクール第1位。エヴィアン（現・ポルドー）国際室内楽コンクール第1位。1975年から1986年インターナショナル弦楽四重奏団のメンバーとして欧米で活動。インディアナ大学助教授、ブラウン大学アーティスト・イン・レジデンスを勤めた。2004年度エクソンモービル音楽賞、07年度大阪芸術賞特別賞、09年大阪市民表彰（文化功労部門）、現在、いずみシンフォニエッタ大阪コンサートミストレス、相愛大学教授、東京音楽大学特任教授。

つくんだらうと思いますよね。

**小栗** そうですよ。私自身モーツァルトは弾いて喜びを感じてるんですけど、娘が赤ちゃんだった頃、モーツァルトを練習するといつもニコニコしてたんです。人をHappyにする力を持っているんでしょうね。二歳位になるとメンコン<sup>※1</sup>の冒頭「ページを弾くと「怖い」と言い、チャイコン<sup>※2</sup>の二楽章は「悲しい」と。何の知識のない子どもにもそうしたことは伝わるんですね。

**米團治** メンデルスゾーンもベートーヴェンもチャイコフスキも人間の感情をそのまま音にするのに、モーツァルトはそうじゃないですね。

**小栗** そうですね。



**米團治** モーツァルトは感情の狭間を縫う音楽だと感じます。例えば、クラリネット・コンチエルトの第二楽章はメランコリックで悲しい印象ですが、実は長調なんです。長調であんな物悲しい音楽を作るなんて…。

語で、歌唱の部分はミニオーケストラの演奏で「マダミーナ」が「見てみいな」になったりして大阪弁で歌いだすと。

**米團治** 「ドン・ジヨバンニ」改め「ドンならんな」になったり（笑）。

**響** 「背広屋の利発な結婚」「ドンならんな」「和菓子屋騒動記 こしあん取つて」と三作あるんですが、僕はワーグナーまでいきたいな（笑）。

**小栗** わっ、すごい（笑）。

### ベートーヴェンのクアルテットも彼の魂の歴史が伝わってくる。

**響** 純粹なクラシックの話に戻りますが（笑）、シンフォニーは不特定多数に向けて声高に演奏するようなもので、弦楽四重奏は特定の誰かに語りかけるという印象があるのですが、いかがでしょうか？

**小栗** そうですね。たしかに弦楽四重奏はホールで多くの人達に聴いていただくというより、身近な大切な人に演奏してもらったり、聴いてもらいたい

**響** 最晩年に書いた作品ですね。確かにあれはこの世のものだとは思えない。

**米團治** わずか三十五歳で人生の到達点をすでに確信し、スコアも修正なしで書く。天才という言葉を使うのが不適当なくらい、まさに神様だと思います。

### 落語に合わせる音楽は弦楽クアルテットがちょうど良い。

米團治

**響** 室内楽と落語はちよつと似ていませんか？

**米團治** 確かに、楽器は三味線、太鼓、笛、ドラと最小限で、クアルテットに似てますね。

**響** それは上方だけですよ。

**米團治** 今は江戸落語も出囃子を使いますが、大正時代までは出囃子すらなかった。まさに上方は囃り物あつての落語です。  
**響** そうした意味では室内楽ですよ。

**米團治** そうですね。大道芸が始まりだそうですが、楽器のサイズは室内楽ですね。響さんと「おべらくご」をしたり、最近落語で「フィガロの結婚」を

語つたりもしていますが、合わせる音楽は弦楽クアルテットがちょうど良い。いわばMサイズの音楽が落語には合いますね。

**小栗** 「おべらくご」は、どんなきっかけ？

**米團治** 初めてオペラを観た時、話がわからず、解説書を読んでもようやくわかった。それで、落語で表現したらわかりやすいのではないかと。

落語は子どもから高齢者まで、解説書なしでわかる芸なので、この手を使ってオペラを表現してみたいと思って「おべらくご」を始めたわけですよ。

**響** 「フィガロの結婚」改め「背広屋の利発な結婚」の台本を書かせていただきました。

**小栗** セビリアじゃなく背広屋なんですか（笑）。  
**米團治** 大阪・船場の話です。  
**響** アルマヴィーヴァ伯爵が旦那でね。

**米團治** 伯爵夫人はごりよんさん（笑）。

クアルテットの極みかな…。

**響** 上方落語にはそうした傾向があるのですか？

**米團治** いや、今初めてそう思いました（笑）。落語は日常の森羅万象が全てネタになっていて「はてなの茶碗」は天皇家、「らくだ」は裏長屋というように、多種多様な世界の出来事が描かれています。

**響** ネタの間口が広いということですね。

**米團治** だから、音楽ならフルオーケストラあり、室内楽ありという感じでしょうね。



**小栗** 無伴奏は何もかも自分の思う通りに出来るし、クアルテットはみんなの思いを汲みながら一つのものを作っていく。

オーケストラは指揮者の音楽観に合わせて大きなものを作るといいうように、気持ちが変わ

**響** スザンナは女御衆のスーパーで「ちよつとスーさんなあ」というと「ちよつとスーザンナ」になる（笑）。元々は日下部さんがきっかけを作られたんです。アルカイックホールに隣接するオクトホールが出来た時、こけら落としにしたいと、台本の依頼を頂きました。当初は抜粋版のオペラにタキシード姿の米團



おべらくご「フィガロの結婚」(2014年9月28日京都芸術劇場 春秋座) 撮影: 濱屋純一

治さんが解説者で登場する予定だったので、ですが、壺家が解説するだけでは面白くないと思つて、舞台上に高座を作ることになりました。それなら落語に合わせた時代背景で良いのではないかと思つて、昭和初期の船場を舞台にしました。すると、ゲツとわかりやすくなりました。

**米團治** 舞台下手で文楽の大夫さんが語るような感じで喋り、それに合わせて歌手の方々がパントマイムで動くんですよ。  
**響** あらすじの部分は全部落

るように思います。

**響** なんとなく音楽と社会の在り方は似ていますよね。

**小栗** 統率の中で自分を活かすというか、小さな縮図ですね。  
**響** 落語は全く一人なので、無伴奏と似てますよね。

**米團治** うーん、無伴奏に近いのかな…。僕は楽器を演奏しないので、無伴奏がどこまで精神的に追いつめられるのかわかりませんが、確かに近いものがあるように思いますね。

**小栗** 無伴奏はずっと二人で精神的に大変ですよ。

**米團治** ああ、そうか。無伴奏か、落語は…。  
**響** 一度モーツァルトを休んでパツハを聴いて落語に生かしてみては？

**米團治** それは良い提案を頂きました。確かにパツハの無伴奏はのめりこみますよね。

**小栗** いろんな解釈があり奥が深い…。

**響** フランス風からドイツ風など多種ありますから、江戸と上方の違いにも通じるかもしれない。上方はどちらかというとフランスに近いのかも…。

※1 メンデルスゾーンのヴァイオリンコンチエルト(協奏曲ホ短調)

※2 チャイコフスキのヴァイオリンコンチエルト

米團治 いや、フランスはなんとなく京都っぽいなあ。大阪はイタリアだね。

響 そうか「オペらくご」を作った時、イタリア語と大阪弁のイントネーションは似ていると思いました。

米團治 「イタリアーノ」「ペスカトーレ」のように大阪弁も「食べたりのな」「飲んだりーな」と最後から二つ目の音が上がると響さんおっしゃってましたよね。



小栗 本当だ(笑)。

米團治 気質的にも大阪人もイタリア人も根アカですしね。

オーケストラには様々な響きがあり、一人では作れない大きな世界観が広がる。——小栗

小栗 以前、京響で指揮者をされてましたよね。

米團治 KBS京都の仕事をして京響とつながりができたので、勝手に脚本を書いて(笑)、

モーツァルト没後二百年の年に「歌劇(過激)モーツァルト」というのをさせて頂きました。着物の生地で作られたロココ調のモーツァルトの衣装を着て指揮棒を振りました。

響 皆さんご苦労なされたと思いますが…(笑)。

米團治 確かに(笑)。それがきっかけで井上道義さんの指揮で「兵士の物語」をさせて頂き、

どんだんクラシックの世界に入り込むようになりました。「なんで漸家がクラシックやねん?」と言われたら「どっちも古典や」と。アコースティックで奏するのは洋の東西を問わず、通じるものがあると確信しています。近年は大阪交響楽団と毎年大晦日にジルベスタコンサートをするのですが、私の指揮のコーナーがあるんですよ。

小栗 そうなんですか。

米團治 一度聴いてください。「フィガロの結婚」の序曲、上達しましたから。

響 「フィガロの結婚」は二度走り出したら何もすることはないですからね(笑)。

米團治 そんなことないです

よ(笑)。スピード感だけじゃなくて、その中にある「情」も表現していますからね。

響 そんなにも高度なんだ(笑)。後はどんな作品を?

米團治 シュトラウスやレハールのオペレッタなど、今度は「春の声」を。

響 リクエストもある(笑)。

米團治 もちろん(笑)。

響 指揮と落語の時では、芸の違いはありますか?

米團治 落語は全部一人なので指揮もしているんですよ。例えば、喜六と清八を演じながら、どう操ろうかとか。そうした意味では演者であり、指揮者でもある。だから、指揮棒を持った時に「落語みたいや」と思ったんです。男たるもの、「指揮台と風呂屋の番台には一度は立たなアカン」という親父の名言があるんですけど(笑)、指揮を二回やったら病みつきになりますね。

響 小栗さんはオーケストラでの演奏の楽しみは?

小栗 オーケストラには様々な響きがあつて、一人では作れない大きな世界観が広がります。空間も広がり、語彙も豊富だ

とか、そうしたことを感じながら弾くのは面白いです。一人で演奏する時とは比べものにはならない色彩がある。その醍醐味が違いますね。

響 無伴奏とは対極にあるという感じですか?

小栗 対極というより、オーケストラは多くの個性を一つの響きにまとめるのはならないですから、皆がどう感じているかを瞬時に察知しながら弾きます。コンサートマスターで弾く場合、感じることを自由に発信するということに、自己主張の仕方が変わると思います。



米團治 音響チェックで大

ですよね。同じ曲を同じメンバーで弾いても会場が変われば全然違う。落語ですら音響照明チェックに結構時間をかけます。オーケストラの場合もそうですよね?

小栗 そうですね。複数の人で音響チェックをして、意見を

出し合つてコンディションを整えます。

米團治 スタッフの意識の差で良くも悪くもなりますよね。

小栗 それはありますね。

響 出演者が心地よく演奏できて、お客様も心地よく音楽が聴けるという…。

小栗 スタッフが一生懸命協力してくださるから実現できるように感じます。

響 それを突き詰めると、結局は愛情ですかね。

小栗 作品や音、出演者、お客様に対する愛情でしょうね。

「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」は、文化が人を育てるというお手本。——小栗

響 私は文化を大切にしない街は荒廃していくと思うんですね。今の大阪はそんな傾向にあるのかもしれない…。

米團治 文化が経済を作ることをわかっている人が統治してくれば良いんですけどね。

小栗 今はネットが便利になりすぎて、本物に触れることが少なくなつたように思います。



響 生身の人間が舞台と客席で交流しているという感覚がないわけですね。舞台も画面を見ている感覚なんじゃないかな。

小栗 そう、怖いですよ。

響 子ども達によく話すのですが、デジタルの音楽は万人に向けた袋菓子で、コンサートで聴く音楽はお母さんの手作り菓子だと。あなたのために心を込めて作られたお菓子だとね。

だからこそ、YouTubeなどで手軽に音楽が聴ける時代に、わざわざ百年以上も前の曲を聴きにコンサートへ行くんだと。落語もお客様に語りかけるものだから、毎日違うのでは?

米團治 その通りです。

小栗 ほんと二期一会ですね。聴く人がどのように聴くかによって演奏が変わる。話さないけれど交流しているんですよ。

米團治 空気のキャッチボールですよ。

小栗 そう。そのキャッチボール

よ(笑)。スピード感だけじゃなくて、その中にある「情」も表現していますからね。

響 そんなにも高度なんだ(笑)。後はどんな作品を?

米團治 シュトラウスやレハールのオペレッタなど、今度は「春の声」を。

響 リクエストもある(笑)。

米團治 もちろん(笑)。

響 指揮と落語の時では、芸の違いはありますか?

米團治 落語は全部一人なので指揮もしているんですよ。例えば、喜六と清八を演じながら、どう操ろうかとか。そうした意味では演者であり、指揮者でもある。だから、指揮棒を持った時に「落語みたいや」と思ったんです。男たるもの、「指揮台と風呂屋の番台には一度は立たなアカン」という親父の名言があるんですけど(笑)、指揮を二回やったら病みつきになりますね。

響 小栗さんはオーケストラでの演奏の楽しみは?

小栗 オーケストラには様々な響きがあつて、一人では作れない大きな世界観が広がります。空間も広がり、語彙も豊富だ

ルは特別なもので、それが私たちの人生にとって重要なのだと思います。そうした意味で「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」は素晴らしいと思う。最近では世界的にも名前が知られてきていますし、クアルテット!エクセルシオやロータスクアルテットという、このコンクールの出身者の活躍は嬉しいですね。

米團治 すこいですよ。

小栗 それこそ、文化が人を育てていると思いますね。

無伴奏の曲目、つまりいろんなネタを増やし、それらを磨いて研ぎ澄ませる。——米團治

響 最後に、これからの夢についてお聞かせ願えますか?

小栗 もう少し落ち着いたら、子ども達を教えたり、自分の音作りをしてみたいですね。

響 年齢を重ねると音楽は変わると思いますか?

小栗 どうでしょう?でも、心を打つものは違ってきましたし、若い頃に純粋に演奏したものと様々な経験を踏まえた上での演奏とは違うでしょうね。

響 無伴奏とは対極にあるという感じですか?

米團治 秋は京都や大阪で恒例の独演会があります。その他、全国津々浦々参りますので、どうぞよろしく願います。響 本日は有難うございました。

# 音楽文化をよそよそする

ステージマネージャー・音楽評論家

小味 洵こみず じゆん

関西の音楽文化に育てられ、その中で仕事をしてきた。演奏会のプログラムノートや音楽評といった音楽に関わる文章を書き、同時に演奏会の現場でコンサートホールのステージマネージャーを務めている。いずみホールに来て十七年目となった。人の縁に恵まれ、こうした得難い経験を重ねてこられたことに、ただただ感謝の念を抱くほかはない。これからも音楽の現場を取り巻く様々な角度から、全力で関西の音楽文化を支える覚悟をしている。



先日、長年にわたって携わってきた「サマーミュージックフェスティバル大阪」の公演を、シンフォニーホールの客席で聴きながら、ある感慨を覚えていた。この日の最後に舞台で演奏されたのは、内田鈴子さんのピアノに田野倉雅秋さんのヴァイオリンと近藤浩志さんのチェロが加わったベートーヴェンのピアノ三重奏曲第七番「大公」だった。八十五歳の内田さんが弾くベートーヴェンは、大阪フィルハーモニー交響楽団の首席コンサートマスターとトップ・チェロ奏者が弾く周到なアンサンブルと相まみえて、宝石のような音楽を響かせていた。そして脳裡に蘇ったのは、偶然にもほぼ同じ座席で聴いた三十二年前

のコンサートのことだった。一九八四年八月二十四日にザシンフォニーホールで開かれた大阪フィルの特別演奏会は「チャイコフスキーの夕べ」と題され、ピアノ協奏曲第一番と交響曲第六番「悲愴」が組み合わされた名曲プログラムで、指揮は七十六歳の朝比奈隆氏、ピアノの独奏者が当時は相愛大学の教授を務めていた内田さんだったのだ。今は親しくお話ししているが、中学二年生の私はもちろん内田さんのことを知る由もない。そもそもオーケストラの演奏会に出かけたのも、まだ二度目のことだった。御大がなるようにタクトを振りかぶると、ホルンの咆哮に導かれて分厚い響きが押し寄せてきた。



文中で触れた演奏会のプログラムとチケットの半券

当時の大フィルは本当に大きな音がしたものだ。そこに続いたのが、内田さんの奏でるピアノの底鳴りするような豊穣な和音だった。その衝撃を、昨日

もりだ。しかしながら、中学生の少年が単に中年の大人になっただけではない。時を隔てた同じ空間で、内田さんの弾くピアノを聴きながら感じたことがあった。如何に関西の音楽文化を支えるのかという、その責任を突きつけられているような気がしたのだ。思いがけず今の自分を見つめ直す契機になったように思う。

一九九九年の四月以来、いずみホールのステージマネージャーを務めている。もう十七年目になったが、この仕事をすることにになった偶然と、その後の短いとは言えない時間があったらした経験の得難さに、ただただ感謝の念を抱くほかはない。「ステージマネージャー」を

## 【プロフィール】

1971年大阪生まれ。関西学院大学、および同大学院で音楽学を学ぶ。関西地方を中心に多くの演奏会で曲目解説を執筆するほか、「朝日新聞(大阪本社版)」などで演奏会の音楽評を担当する。ステージマネージャーとして、2009年に第6回上方の舞台裏方大賞を授賞。

日本語にすると「舞台監督」となるが、オーケストラのステージマネージャーとは違って、未だ曖昧な位置付けなのがコンサートホールのステージマネージャーだ。ホールによって呼称も違えば、仕事の範囲も様々である。あくまでも公演を受け入れるホール側の舞台監督となるわけだが、何をどこまですべきなのかは、これだけ続けても未だ逡巡する中にある。

いずみホールで仕事を始めるまでは、音楽学を専攻する大学院生だった。将来への不安を抱きつつ、オーケストラでステージスタッフのアルバイトを



いずみホール

していたのが、いずみホールに来るきっかけになった。「君は少し違うと思うんだけど」と当時の大阪センチュリー交響楽団のステージマネージャーで

あった長谷川敬氏に紹介されたのが、そもそもその馴れ初めだ。振り返ると、いくら探求しても尽きるこの豊かな音楽の世界に、高校生の頃と自覚したのは、高校生の頃だったと思う。演奏実技を職業とするレベルに到達させるには時期が遅いと自覚したが、それ以外のことで、音楽を仕事にする方法はまったく思いつかなかった。それでも、なぜこんなにも音楽は心を揺さぶるのかというのを知りたいと思っただけで、音楽学という学問の存在を知った。さほど自覚もないまま、音楽大学ではなく、一般大学の文学部で美学や他分野の芸術学

野の芸術学と共に音楽学に取り組みむことができたのは、今となっては掛け替えのない時間だった。

た。師である畑道也先生はもとより、家族的な暖かさを持った関西学院大学の美学研究室で受けた数え切れないほどの学恩は、仕事の範疇を超えて、

人間として生きていく上での指標となっている。

幼い頃にピアノは習ったが、「バイエル」がつまらなくて止めてしまった。中学で音楽にのめり込みをしたものの、独学で再開したピアノは遅々として進まない。同じように音楽を聴く同志もいなかった。一人で音楽と向かい合いながらも自信を持ってない日が続いた。それが一転したのが、大学に入り、運良く関西学院交響楽団で打楽器パートに入ることができたからだ。これも偶然で大阪フィルの演奏で憧れた中谷満先生に師事することもできた。この大学四年間の演奏経験がなければ、私の音楽理解は机上の空論で瓦解していただろう。学生オーケストラの一員としてはあつたが、演奏現場を実体験しつつ、百人近くの組織の渦中に放り出されたことは、骨の髄まで身にしみて貴重な肥やしになった。

人の縁に恵まれ、演奏会のプログラムノートや音楽評といった音楽に関わる文章を長く書き続けてきた。最初に曲目解説を書いたのはもう二十年も

前だから、ステージマネージャーを始め以前からになる。今改めて思うことは、言葉が持つ規定力の強さである。音楽を構成するのは、空気の振動である音であって、手に取って触れたり、目で見たりはできない。その見えない振動が鼓膜に届くことでしか感じ取ることのできない音を言葉で表現する責任の重さは計り知れないほどで、軽々しく言葉に置き換えてしまえば、音楽が持つ多様性を奪い取ってしまう恐れがある。ひとたび特定の言葉で表現されてしまえば、その言葉の持つ意味が実体を超えて付きまといてしまうことを、自戒も含めて、音楽について文章を書く者は強く肝に銘じるべきである。あまりにも無責任、無造作に書かれた言葉が多すぎるのだ。

長々と自分史を書き連ねてしまったが、こうして関西の音楽文化に育てられ、その中で仕事をしている自分を再確認することができた。これからは音楽の現場を取り巻く様々な角度から、全力で関西の音楽文化を支える覚悟をしている。



日本で最も長い歴史を持つ交響吹奏楽団「オオサカシオンウインドオーケストラ」(以下「シオン」)を訪問しました。

「シオン」は大日本帝国陸軍第四師団軍楽隊を前身として一九三三年に誕生し、大阪市民の楽団として親しまれてきた楽団で「東京佼成ウインドオーケストラ」「シエナウインドオーケストラ」と並び日本三大吹奏楽団として高い評価を得ています。

大阪市の直営から民間への移行での苦労など理事長の延原弘明さんと広報の石井徹哉さんにお話を伺いました。



オオサカシオンウインドオーケストラ

◆歴史  
一九三三年六月第四師団軍楽隊の元隊員有志により「大阪音楽隊」として創立。一九三四年に大阪市直営になり、一九四六年「大阪音楽楽団」に改称。日本

で唯一の地方自治体が所管する専門吹奏楽団として、大阪市の公式行事での演奏の他、定期演奏会や園児、児童を対象とした演奏活動などに力を入れていた。楽団員は大阪市の職員で楽団の運営費の大半が市からの支出で賄われていた。しかし市政改革の環として廃止が決まり、二〇一四年四月一般社団法人による運営に移行した。この時、作曲家の宮川彬良氏が音楽監督に就任、芸術顧問に指揮者の秋山和慶氏を招聘した。今年三月には「大阪市音楽団」から「オオサカシオンウインドオーケストラ」に名称変更した。

◆活動  
「シオン」は吹奏楽の演奏と演奏者の指導育成事業を主な活動として行っている。楽員は現在三十八名で、昨年度、コンサートを百五十七ステージ行った。定期演奏会の他、木管五重奏、サクソフォーン四重奏、金管奏、百五十七ステージの内四十ステージを数えている。「シオン」になって本格的に始めた、赤ちゃんを持つお母さん方も開ける「ファミリーコンサート」にも力を入れており、今年の上期だけでも十三公演行なった。コンサート活動のほか吹奏楽フェスタを企画しており、コンクールの課題曲の演奏指導やクリニック、楽器別講習会などを行って好評を得ている。またフェスタとは別に学校別指導も行っており、要請があれば学校に楽員を講師として派遣し、学校が持つそれぞれの状況に細かく対応している。

◆吹奏楽

全日本吹奏楽連盟に加盟している団体は昨年十一月現在で、二四・二四二団体で、演奏人口は百万人以上とも言われているが、加盟団体の内八五パーセントが小中学校、高等学校のクラブ活動として行われ、演奏会もするが、その大多数がコンクールを目指している。同じコンサートでもオーケストラにはブローの楽団が多くあり、聞きに来るファンも吹奏楽に比べ圧倒的に多い。こんなにたくさんの方が吹奏楽をやって楽しんでるのに、吹奏楽は学校のクラブ活動というイメージが強く、また吹奏楽の場合プロで活動している団体は非常に少ない。「シオン」では吹奏楽を演奏することだけでなく、聞いて楽しむ人も増やすことに取り組まなければならぬと考えている。

◆危機

二〇一四年三月までは大阪市の職員として、市の行事での演奏や吹奏楽指導が主な仕事で、民間との接触はいつさい禁止されていた。

◆課題

最後に、今後の取り組みについてお聞きしたところ、「今やっていること自体が新たな取り組みでこれを軌道に乗せるのが課題だ。九十年以上の活動実績と大阪市民の温かい支援はあるが、少しでも経営を安定させるためには一般社団法人から公益社団法人への移行を早急に進めて行かなければならない。吹奏楽団体のビジネスモデルができていない。世界を見回してもないので、これを作り上げていくのが大きな目標」と話していただいた。

私と名曲 名演奏が作る名曲

小野 善康 (おの よしやす)  
〈プロフィール〉  
1979年 東京大学大学院修了(経済学博士)  
東京工業大学大学院教授  
大阪大学社会経済研究所所長  
内閣府経済社会総合研究所所長などを経て  
現在 大阪大学社会経済研究所教授



名曲となるには名演奏が欠かせない。一度、心に残る名演奏を聴くと、たとえ別の音楽家の演奏でも、そのときの感動がさまざまなとよみがえってくる。名曲とは、名演奏が作るのかもしれない。

一昨年、夏の数ヶ月間をミュンヘンに滞在したが、音楽を聴くに

は素晴らしい環境だった。徒歩二〇分でバイエルン国立劇場があり、夕方そぞろ歩いていると辻音楽士たちによるアイネ・クライネ・ナハト・ムジークが流れてくる。レジデント宮殿やニンフェンブルク城でも、毎晩のようにコンサートをやっている。到着後すぐに国立劇場で『リゴレット』、ミュンヘン・フィルの野外音楽会ではガーシュインとドボルザーク『新世界』を聴いた。

モーツァルトの故郷ザルツブルグも電車で二時間足らずである。私にとって生涯忘れられない演奏を聴いたのは、そのザルツブルグ音楽祭であった。

当日、いきなりザルツブルグ祝祭劇場に行つたのにもかわらず、幸運にもズービン・メータ指揮ウィーン・フィル、ピンカス・ズーカーマンのソロによるモーツァルトのヴァイオリン協奏曲第三番とマーラーの交響曲第五番のチケットが手に入った。しかも中央横通路で前が広く空いた最高の席だった。

正直言って、それまでモーツァルトのヴァイオリン協奏曲は、私にとってベートーヴェンやチャイ



ザルツブルグ祝祭大劇場

コフスキーなどの大伽藍に隠れた小品という印象しかなかった。ところが、この演奏で印象が一変し、私にとって一番の名曲になってしまった。

ザルツブルグでの演奏は、素晴らしい、一語だった。ソロの最初の重音、特にG音からいきなりズーカーマンの世界に引き込まれ、頭が真っ白になった。ズーカーマンは気負ったところ無しに一つ一つの音を実に丁寧に、綺麗に、透明に出している。ヴァイオリンの方に大きく首をかしげながら、自分もその音に聴き入っているようだった。特に第二章では、各音がみずみずしくひとつひとつの粒となつて、ふるぶると震えながら耳に入って溶け込んでくる。会場は水を打ったように静まりかえり、満員の聴衆の気配さえ消えてしまった。演奏家本人も音の世界に埋没し、ヴァイオリ

ンが自分で勝手に音を奏でている、とすら感じた。オケも、ズーカーマンの音に聴き惚れ、それを慈しみ、包み込んでいる。祝祭劇場がこの世から隔絶した私だけの異空間になった。

そのうち、勝手に涙が溢れてくる。音楽を聴いてこんな経験をしたのは、後にも先にもこれだけである。

その後、プラハ国民劇場で『カルメン』を聴いたり、バイエルン国立劇場で『愛の妙薬』を演奏したりしたあと、国立劇場でバイエルン歌劇場のオケ、マリオ・ヴェンツァーゴの指揮によるシベリウスのヴァイオリン協奏曲とシュエマンの交響曲第一番を聴いた。

シベリウスを弾いていたのはステファン・ジャキイェヴ。若い長身の演奏家で、江口洋介か高橋克典のような美形。ウクライナ人の父と韓国人の母は二人ともボストンで物理学の教授であり、本人もはじめはハーバードで心理学を専攻したという。

ジャキイェヴの演奏は、言ってみれば日本刀ですばつと切るように鋭く、凄みがあった。このスタイルはシベリウスにピッタリである。オーラを放ち才気を振りまき、素晴らしいテクニックと表

現で、観客をぐいぐい引きつけている。ヴェンツァーゴに率いられたオケも非常にリズムカルで、ジャキイェヴの演奏と火花を散らしている。ヴェンツァーゴは二曲目のシュエマンでは、第二章から第四章まで休みなしに二気に突き進み、指揮台の上で踊っていた。

演奏のあと、ジャキイェヴは聴衆の拍手に何度も何度も呼び出され、足踏みの音まで鳴り響いた。耳の肥えたミュンヘンの聴衆にこれだけ喝采を浴びるだけのことは、確かにあった。

しかし、ズーカーマンの神がかった演奏を聴いた私には、これが名演とは思えなくなつてしまった。それはオケと奏であう協奏曲というよりは、オケと競う競奏曲であった。

帰国後、私の持つギドン・クレーメルのヴァイオリン、ニコラス・アーノンクール指揮のウィーン・フィルによるモーツァルトのヴァイオリン協奏曲第三番のCDを改めて聴いた。驚いたことに、それまで何気なく聴いていたCDだったのに、涙がぼろぼろ溢れてきた。

これが、この曲が私にとって第一の名曲になった理由である。

# カフカの『変身』に



大阪大学大学院文学研究科教授

伊東 信宏

伊東信宏（いとう のぶひろ）プロフィール  
一九六〇年京都市生まれ、大阪大学文学部卒業、同大学院修士（文学博士）、リット音楽院（小ガリ）にて留学。  
大阪教育大学、大阪大学准教授などを経て、現職。著書「ハルトーグ」（中公新書、一九九七年）で吉田秀和賞、  
「中東欧音楽の回路」（岩波書店、二〇〇九年）でサントリー学芸賞を受賞。  
最近の著作として、「ハルトーグの民俗音楽編曲」（大阪大学出版会、二〇二二年）がある。

筆者がハンガリーに留学していたのは、体制転換からまだ日も浅い一九九二年から三年にかけてのことで、当時は旧東側時代の痕跡はまだ色あせていなかった。役所や警察などの官僚主義も強烈で、何事も便利でソフトな日本の感覚からすると、

役所での扱いは収容所の四人にでもなったような気がした。たとえば在留証明というような紙切れ一枚のために、朝から行列にならんで、愛想の悪い役人たちにあちらこちらの窓口をたらい回しにされていると、ああ自分より紙切れの方がエライのだ、自分は紙切れに書かれた証明の影なのだ、という気がしてくる。

そんな時に日本から持ってきたカフカの文庫本を読むと、日本ではもうひとつピンとこなかつた主人公たちの状況が異様にリアルに感じられて驚いた。

ればなおるのだろう、とうろたえることもないし、なぜこんなことが自分の身に起きたのだろう、と誰かを恨んだり、何かに憤ったりすることもない。彼が悲嘆にくれるのは、家族を養うことが出来なくなったから、つまり彼以外の大多数の欲することを自分が引き受けることができなかったからである。「家計の話になると、とりあえずグレーゴルはいつも、もたれていたドアから離れ、ドアの横にある冷たい革のソファに倒れこんだ。恥ずかしさと悲しさのため、からだが発熱くてたまらなかつたからだ。」（傍点は引用者による。）

なにより不思議なのは、彼が自分の将来に抱いていた希望や夢が台無しになったことについて二度も悲しまないことだが、これは先の掟に照らせば了解できる。彼の欲するものは、彼以外の大多数の欲するものに完全に同化していたのだから、彼以外の者たち（つまり父や母や妹）の願いを叶えることこそ、彼の希望だった。だからこそ、彼は妹を音楽学校に入れてやる、とクリスマススイブに晴れやかに発

自分はもちろん判決を待つているわけでも、誰かに「犬のように」殺されそうなわけでもなかつただけれど、カフカが書いているのは、全然不条理などではなくて、日常そのものなのだ、という気がした。

先日雑誌に載っていた多和田葉子さんの『変身』（「かわりみ」と読むらしい）の新訳（「すばる」二〇二五年五月号）を見て、そんなことを思い出し、久しぶりにいくつかの訳を並べて読んでみた。多和田さんの訳では最初の文章はこうなる。「グレゴール・ザムザがある朝のこと、複数の夢の反乱の果てに目を醒ますと、寝台の中で自分がばけもののようなウンゲツイーファー（生け贄にできないほど汚れた動物或いは虫に姿を変えてしまっていることに気がついた。」強烈な訳だが、ここでその是非

表することにあればどこかわるのである。彼は妹の弾くヴァイオリンに誘われて、部屋を這い出し、そこから追い立てられて力尽きる。驚くべきことに、他の者の願いを叶えること以外に彼の欲望はない。この話の一番不気味なところは彼が虫に変身したことなどではなく（毒虫同然の身になることは、先ほども書いたとおり、誰にでも起こりうることだ）、彼の欲望のあり方である。彼は我慢しているわけではない。実は他にやりたいこともある。妹のために、両親のために働いているわけではないのだ。その過剰適応ぶりが不気味だ。

「あなた以外の大多数が欲することを、あなたの欲望とせよ」という掟は、もちろん資本主義の、市場経済の掟である。かつてケインズが言ったように、資本主義のゲームとは、「種の美人コンテストみたいなものだが、誰が一番美人と思うか、を答えるゲームではなく、他の大多数が一番美人だと思うであろう人を当てるゲームだ。このゲームの

を論じようというわけではない。ただ筆者の視角から、改めて小説について思ったところを記しておこう（以下、訳は筆者が近年馴染んでいる丘沢静也さんのものを引用する。）

毒虫に変身することは、現代ではそれほど異常なことでも難しいことでもない。例えば、満員電車の中で、突然腕をつかまれ「この人痴漢です」と叫ばれるだけでいい。それが事実であるかないかに関わらず、私たちは毒虫同然の身となって家に帰ることになる。そんなことは誰の身にも起こりうる。明日でも起こりうる。どんな形ででも起こりうる。

事実であるかないかに関わらず、家族は彼を受け入れるだろう。彼を拒否することは許されていない。家庭が彼を引き受けるルールを内面化した者達は、これをあらゆる空間に持ち込む。学校では、これは例えば「いじめ」の形をとる。なぜその子を選びめるのか、と問われれば、生徒達は色々細かい理由はある。究極的には要するにその子がいじめられているからだ、と答えることになるだろう。「いじめ」とは、この子がいじめられるべき子だ、と言い当てるゲームなのだ。彼らは学校で資本主義のレッスンにさらされ続ける。

あるいは「空気を読め」という強迫が、このルールの短縮形であることも明らかだろう。「あなた以外の大多数の欲するもの」が「空気」であり、これを読めない行動は非難の対象になる（いじめられるかもしれない）。私たちは、学校生活でも、社会生活でも、他者の欲望するであろうこと、にがんじがらめにされている。

近年の新型インフルエンザ騒動ですっかりおなじみになった、マスク姿。通勤途中の人々が皆揃いも揃ってマスクを付けている映像を見ていて、どこか背筋が寒くなるのは、「マスク」の役割

ないで、一体どこの誰がそんなものを引き受けるというのか。「あなた以外の大多数があなたに欲しないことを望んではならない」というのが、この日本という除菌ファシズムの国の掟である。そして、拒絶できないままに家に迎えられた彼は、家族にとつて、誰にも見せられない、おぞましい毒虫となる。かくしてグレーゴルザムザは、毒虫として目覚める。

「あなた以外の大多数があなに欲しないことを望んではならない」、あるいは逆に「汝以外の大多数が欲することを、汝の欲望とせよ」という掟は、もちろんグレーゴル自身にも内面化されている。ほとんど過剰に内面化されている。だから、彼は自分の身に起きた異変にもかかわらず、二度も自分の身を案ずることがない。神にも祈らない。どうす

がいつの間にか転換していたからである。それは「私」を空気に漂う菌から守ろうとする防壁ではなく、むしろ私が「他者」に菌を撒き散らさないための防壁となった。他者の欲望が問題になった途端に、この国の人々は一糸乱れぬ行動を起こす。それはどこかの国で、独裁者が恐怖と情報操作によって作り上げたマスゲームにも負けないほどの完璧さで機能する。グレーゴルの欲望の不気味なあり方は、不思議なことに我々のこの国のこの時代にこそ相応しい。

二〇〇三年から続けてきたこの連載、あんまり長く同じ人間が書き続けるのもどうかと思つて、今回で最後としていた。今回のように音楽とほとんど関係のない話も好き勝手に書かせていただき、ありがたかった。数年前にまとめた単行本にも、この連載の文章をきっかけとして書かれた章がずいぶんあつて、筆者にとつては理想的なメディアでした。長い間ありがとうございました。

# 大会の成熟といふこと

## 第七回メルボルン国際室内楽コンクール

音楽ジャーナリスト  
渡辺 和

去る七月十一日から十九日、春学期が始まった人類最南端文化都市で、メルボルン国際室内楽コンクールが開催された。

第二回以降は弦楽四重奏部門とピアノ三重奏部門が競われるこの大会、過去の受賞団体には、大阪も制したトリオジャン・パウルとトリオラファール以下、タンクストリームQやアタックQなど身近な名前が並ぶ。第七回となる今回も、二〇一一年大阪に参加したノガQと、昨年大阪第三位、去る四月のロンドン大会第二位となったヴェローナQ(旧ヴァススムートQ)が弦楽四重奏部門に参加。ピアノ三重奏部門には、昨年の大阪ファイナリストのトリオアドルノが挑戦している。

国際大会招聘レベルの若い団体の数は限られる現実を鑑みれば、顔ぶれが重なるのは当然。それを差し引いても、メルボルン大会は大阪によく似ている。一九九〇年代前半に創設、クラシック音楽文化の中心から隔たった開催国の最大都市圏に次ぐ都市が会場、各ジャンル十程度の参加団体招聘経費は大会持ち、弦楽四重奏を軸に二ジャンルのコンクール同時進行：類似点はいくつでも列挙できよう。

姉妹コンクールと呼べるほどの両大会だが、現場で感じる空気は相当に違っている。以下、大阪との違いに焦点を絞り、メルボルン大会四半世紀の成熟を振り返ってみよう。

### ◆会場及び日程

メルボルンと大阪の最大の違いのひとつは会場である。第三回大会までは、市の北に広がるメルボルン大学の講堂で予選、市中心ヤラ河畔に聳えるアーツセンター大ホールで本選が開催されていた。参加者は冬休みの大学寮に宿泊、楽器を抱えキャンパスを横切り会場に向かったものだ。第四回からは予選はサウスメルボルン旧市庁



予選会場の日サウスメルボルン市庁舎講堂に並ぶ審査員。トリオと弦楽四重奏共通で、大阪で審査したマーティン・ビーヴァーの顔も。

舎を転用したオーストラリア国立音楽アカデミーに移るも、本選は巨大会場だった。市庁舎やアーツセンター前に見渡す限り大会の幟がはためいていたこの頃、大会期間中は市内の教会やデパートで参加団体による無料演奏も行われ、「街を挙げての四年に一度の大イベント」という盛り上がりがあったものだ。

とはいえ、メルボルン響が本舎を転用したオーストラリア国立音楽アカデミーに移るも、本選は巨大会場だった。市庁舎やアーツセンター前に見渡す限り大会の幟がはためいていたこの頃、大会期間中は市内の教会やデパートで参加団体による無料演奏も行われ、「街を挙げての四年に一度の大イベント」という盛り上がりがあったものだ。

もうひとつ興味深いのは日程だ。昨今の遠隔地開催大会の流れに沿い「招聘団体に可能な限り沢山弾かせる」というポリシーのメルボルン、第二と第二ステージで足切りはなく、両ジャンルとも招聘八団体が

内楽愛好家の潜在的ニーズに応え、「メルボルン国際室内楽コンクール」として二十五年前に誕生した。

特定のスポンサーはなく運営は寄付に拠るもの、全国をカバーしクラシック愛好家に強い影響力を有する公共放送ABCの全面協力もあり、第一二回と成功裏に終わる。が、

なにせ競技会好きのオージード、ファイナリストに自国団体が残らないのが無念でならなかった。一九九七年、本大会の間に国内大会たるオーストラリア室内楽コンクールを開催、組織名称も「オーストラリア室内楽(CMA)」と改める。地元の活躍を期待する聴衆の声に応え、主催団体は活動をコンクールから室内楽教育に拡大させ、結果としてオーストラリアに室内楽ネットワークをもたらしただのである。

タンクストリームQ大阪優勝、ティン・アレーQバンフ優勝とメイジャー大会での豪州勢の好結果が続く、CMAの活動は世界に広く知られるところとなった。実績を評価され、現総監督ベンジャミン・ウードロフ

は今大会を最後にメルボルンを去り、ジュネーブの国際コンクール連盟事務局長への転進が決まっている。それはそれとして、メルボルン大会の独特の空気を醸し出すのは、やはり客席に集う聴衆だろう。とりわけ予選ラウンドが行われる旧サウスメルボルン市庁舎講堂には、世界の室内楽コンクールでも最も純粹に音楽が好きの人々が集まっているのだ。



客席に紹介されるボランティアの面々。

会場に坐るのは、白髪のご隠居ばかりである。話をしてみると、その殆どは初回からこの大会に接し、この大会の成長と共に歳を取ってきた人々だ。曰く、最初はラジオで聴いていたが面白いので会場に来るようになり、それからずっと足を運んでいる。曰く、今はシドニー在住だが昔ここにいた頃に通っていた、今週は休みを取って来て、曰く、妻と二人で地域で歌曲演奏会を主催している、室内楽と歌は本質は同じさ、毎回来ているさ。



優勝したノガQ。予選から客席はギッシリ。

客席ばかりではない、会場入口でチケットをもぎり、さらにはホストファミリーとなり遙々南半球までやってきた若い音楽家らの面倒を見るボランティアたちも、音楽や音楽家が好きてたまらぬ人達なのだ。ホストは、まるで祖父祖母のように演奏を終えた若者らを楽屋で笑顔で迎え、上手いけば一緒にガッツポーズをし、失敗して落ち込めば優しく肩を叩く。巨大都市で行われるコンクールとは思えぬ親密で暖かい空気が、真冬の旧タウンホール全体を覆っている。「オ・モ・テ・ナ・シ」は日本のお家芸ではない。



元ヴァススムートQのヴェローナQ。素材の良さはピカイチ。

最後に、ひとつ残念な事実を記さねばならない。筆者が世界の主要室内コンクールを眺めて歩くようになって二十数年、日本人や日系人がひとりもいない大会は、今回が初めて。しかも、二方で、シンガポールやタイの逸材がファイナリストに名を連ねた。これがどういう意味なのか、真剣に考えるべきであろう。



名前が読み上げられてホッとするトリオ・アドルノ。



## 公益財団法人日本室内楽振興財団 支援企業

大阪ガス株式会社  
関西電力株式会社

アサヒビール株式会社  
サントリーホールディングス株式会社  
ハウス食品グループ本社株式会社

非破壊検査株式会社

大塚製薬株式会社  
住友化学株式会社  
積水化学工業株式会社  
武田薬品工業株式会社  
日本ペイント株式会社

住友電気工業株式会社  
ソニー株式会社  
株式会社東芝  
日本電気株式会社  
パナソニック株式会社  
株式会社日立製作所  
富士通株式会社  
ローム株式会社

東洋紡株式会社  
株式会社ワコール

伊藤忠商事株式会社  
岩谷産業株式会社  
株式会社千趣会  
三菱商事株式会社

近畿日本鉄道株式会社  
京阪電気鉄道株式会社  
南海電気鉄道株式会社  
西日本旅客鉄道株式会社  
阪急電鉄株式会社  
阪神電気鉄道株式会社

株式会社近畿大阪銀行  
株式会社みずほ銀行  
株式会社三井住友銀行  
三井住友信託銀行株式会社  
株式会社三菱東京UFJ銀行  
株式会社りそな銀行

川崎重工業株式会社  
株式会社クボタ  
新日鐵住金株式会社  
ダイキン工業株式会社  
日立造船株式会社  
三菱重工業株式会社

株式会社JTB西日本  
株式会社電通  
株式会社ニュー・オータニ

住友生命保険相互会社  
東京海上日動火災保険株式会社  
日本生命保険相互会社  
三井生命保険株式会社

株式会社日建設計

KDDI株式会社  
西日本電信電話株式会社

野村證券株式会社

株式会社大林組  
鹿島建設株式会社  
株式会社きんでん  
株式会社鴻池組  
清水建設株式会社  
大成建設株式会社  
大和ハウス工業株式会社  
株式会社竹中工務店

株式会社読売新聞大阪本社  
株式会社読売新聞東京本社  
日本テレビ放送網株式会社  
読売テレビ放送株式会社

(関連業種別50音順)

## CONTENTS

座談会	名曲と私
落語もクラシック音楽も同じく古典芸術	名演奏が作る名曲
司会:響敏也	小野善康 .....12
出席者:桂米團治/小栗まち絵 .....1	カフカの『変身』に
音楽文化をささえる	伊東信宏 .....13
音楽評論家 小味渕彦之 .....7	大会の成熟ということ
奏でるよるこび	~第7回メルボルン国際室内楽コンクール~
古箏と私	渡辺和 .....15
中国古箏演奏家・作曲家 伍芳(ウー・ファン) .....9	JCMF NEWS .....17
楽団探訪	公益財団法人日本室内楽振興財団支援企業 .....18
オオサカ・シオン・ウィンド・オーケストラ .....11	

表紙はエスタハーギー城 アイゼンシュタット(オーストリア)

## 平成27年度 第1回理事会開催



理事会

平成27年度第1回理事会が、平成27年6月15日(月)ホテルニューオータニ大阪で開催されました。秋山会長の挨拶の後、越智理事長が議長となり、平成26年度の事業報告並びに決算報告が審議され可決承認されました。また、平成27年度定時評議員会の招集と議題を「平成26年度事業報告と決算報告の承認」「評議員21名の選任(改選期)」とする原案と、理事1名選任の件が可決承認されました。

## 平成27年度 定時評議員会開催



評議員会

平成27年度定時評議員会が、平成27年6月25日(木)ホテルニューオータニ大阪で開催されました。越智理事長の挨拶の後、評議員の互選で村上仁志評議員を議長に選出、先の理事会で可決承認された平成26年度の事業報告並びに決算報告が可決承認されました。また評議員21名の選出(改選期)についても可決承認され、理事1名選任の件も承認されました。最後に小城常務理事が代表理事については決議の省略の方法をとるので結果が次次第報告すると述べました。

**新任理事** 下妻 博(新日鐵住金)

**新任評議員** 秋山 尚之(三井住友信託銀行) 中島 真人(日本電気)

**評議員(再任)** 池田 仁(アサヒビール) 牧野 明次(岩谷産業) 秀高 誠(大林組) 稲垣 直(鹿島建設)

岸本 正美(きんでん) 小田 史幸(清水建設) 後藤 高志(積水化学工業) 金井 隆夫(大成建設)

泉本 圭介(大和ハウス工業) 松永 茂樹(電通) 関本 洋一郎(東芝) 伊勢 拓央(西日本電信電話)

田路 耕一(西日本旅客鉄道) 林 和久(日建設計) 細山 雅利(ニュー・オータニ) 塚本 満(野村證券)

向井 直人(ハウス食品グループ本社) 小松 昌夫(非破壊検査) 梅本 俊和(大阪音楽大学)

なお、望月 規夫(読売テレビ放送) 藤門 浩之(読売テレビ放送)の任期は平成24年6月22日から平成28年定期評議員会最終時まで

**退任評議員** 村上 仁志(三井住友信託銀行) 西川 恵三(日本電気) (敬称略、企業名50音順)

## グランプリ・コンサート2015

### トリオ・ラファール(スイス)

Trio Rafale (Switzerland)



「グランプリ・コンサート」は、3年毎に開催している「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の優勝団体を招いて今年も全国12地区で公演を行います。今回は昨年5月に開催した第8回大阪国際室内楽コンクール&フェスタの第2部門(ピアノ三重奏及びピアノ四重奏)で優勝したスイスのトリオ・ラファールが右の日程で演奏会を行います。

■開催日程■			
熊本	11月1日(日)	益城町文化会館	
三重	11月3日(火)	三重文化会館小ホール	
広島	11月5日(木)	庄原市民会館	
京都	11月8日(日)	京都堀川音楽高校	
山陰	11月9日(月)	ビッグハート出雲	
大分	11月11日(水)	別府大学大分キャンパス文化ホール	
札幌	11月13日(金)	STVホール	
青森	11月15日(日)	青森公立大学	
大阪	11月16日(月)	いずみホール	
高岡	11月18日(水)	富山県高岡文化ホール	
静岡	11月20日(金)	静岡市清水文化会館 マリナート	
東京	11月22日(日)	よみうり大手町ホール	

- 全国共通■
- 主催/ 公益財団法人 日本室内楽振興財団
  - 協賛/ **ダイワハウス・TOYOTA**
  - 助成/ 公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション
  - 協力/ 野村證券株式会社 サカイ・シュトゥンツィ基金
  - 後援/ スイス大使館

# 季節は変わり、街は装いを新たに より魅力的に色彩を変化させていく

美しい自然が季節を変えるとき、街も魅力的に装いを变化させます。

あざやかに映る街の独特な色彩、人の営みや生活風景、  
せわしく響く雑踏や車のクラクションといった刺激までも  
まるで映画のワンシーンのように心へ響きます。

新しい発見や知的な好奇心は、癒やしの特效薬。  
私たちJTBは、すてきな旅のお手伝いをいたします。



**JTB西日本**  
**海外旅行西日本支店**

〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町3-1-8 (本町クロスビル9階)

TEL.06(6252)2711(代) FAX.06(6252)2790

担当:飛松 智久

●編集・発行／公益財団法人 日本室内楽振興財団

〒540-8510 大阪市中央区城見2丁目2番33号 読売テレビ内

TEL.(06)6947-2183 FAX.(06)6947-2198

ホームページ <http://www.jcmf.or.jp>

e-mail [zaidan@jcmf.or.jp](mailto:zaidan@jcmf.or.jp)

**Vol.44**

平成27年10月26日